



Title	「保険とリスク」(フランシス・エワルド著)を読む:スタディ・クエスチョン・メソッドの試み その1:第1段落から第4段落:insuranceについて
Author(s)	長島, 美織
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 24, 109-124
Issue Date	2017-03-24
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/64765">http://hdl.handle.net/2115/64765</a>
Type	bulletin (article)
File Information	109.pdf



[Instructions for use](#)

## 「保険とリスク」 (フランス・エワルド著) を読む

—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—  
その1：第1段落から第4段落：insuranceについて

メディア・コミュニケーション研究院

長島 美織

### Reading 'Insurance and Risk' — An Application of Study Question Method — Part1: From paragraph 1 to 4: On 'insurance'

NAGASHIMA Miori

abstract

This essay represents an attempt to read and interpret one of the classic English-language papers in social science using Study Questions as a guide with the purpose of gaining a deeper understanding of the text. This first part deals with the first four paragraphs of the paper 'Insurance and Risk', written by François Ewald, which is considered an excellent example of the application of some of the key elements of Foucauldian thought to the study of the sociological notion of risk.

## 1 はじめに

内田義彦は社会科学と「読み」ということを生涯追求した先人ですが、彼は本の読み方を2通りに分けています<sup>1</sup>。

1つは情報としての読み、そしてもう1つは古典としての読みです。後者は、「学問的読み」とも、読み替えられますが、現代において圧倒的に多いのは情報としての読みです。情報としての読みは、私たちの通常よくやる読み方、旅行案内としての読み方です。つまり、何か必要な情報を求めて、テキストをその観点から分析しながら読む方法です。これに対して、「古典としての読み」／「学問的読み」は、情報や知識を得るために読むのではなく、作者が何かある事柄について考えた、その認知装置を身につけるための読み方です。言い換えれば、書いてある「対象」について知るのではなく、作者がその対象を「どのような装置(概念装置)でどのように見たか」ということを学ぶための読み方になります。

これは本そのものの属性による区分ではなく、あくまでも読み方の区分です。したがって、どんな本でも原理的には、上の2通りの読み方が可能となります。例えば、旅行ガイドであっても、どこにどのような名所があるか、その由来は何か…といった風に読むこともできるし、そのガイドブック自体がどのような思想のもとにどのような手段で編集されているか、つまり、どういった情報を掲載し、どういった情報を省いているか、どのような順序やレイアウトで情報を配置しているかといったことから、その本の作者／編者の考えを推し量ることが可能となります。歴史に重点を置いた旅行ガイドもあれば、食に重点をおいたものもあります。

同様に、『資本論』であっても『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』であっても、情報として読むことも可能です。実際それをやっているのが、入門書や学問案内、思想の参考書です。つまり、それらの本では、ある思想家の主張を「近代資本主義の発達という社会現象を宗教倫理と結びつけてとらえ、西欧キリスト教、なかんずくプロテスタントの倫理が、西欧における近代資本主義の発展に貢献したと指摘した」<sup>2</sup>といった形でまとめて提供してくれています。もっとも、多くの歴史に残る社会科学の書物は、こういった読みを拒絶するように書かれています。著者は安易に自分の書いていることが情報として簡条書きにまとめられないよう、理解されないように書いています。あたかも、彼らは情報として読まれるくらいなら、理解されない方が良いと言っているように思えます。単なる表面的な「知識」として読まれるくらいなら、葬り去られた方がマシだという覚悟がみえてきます。そういった、情報としての読みを断固として拒否するもの、それが古典です。したがって難解である、とっつきにくい、何を言いたいかわからない、という経験を、読者は最初、することになります。木田元氏は、ハイデガーの『存在と時間』について、こう書いています。

▶1 内田義彦『読書と社会科学』岩波新書1985

▶2 『大卒程度公務員試験 地方上級・国家Ⅱ種 本試験問題集⑧ 社会学』第4版 東京リーガルマインド 2004 17-18ページより合成。

「だが、読もうとしてもさっぱり分からない。いくら読書の訓練は積んだつもりでいたが、文学少年が読んで分かるような本ではなかったのだ。……これは、大学の哲学科に入って、哲学書を読む専門的訓練を受けなければ読めない本だという見当はついた……」(日本経済新聞2010年9月18日)

超一流の頭脳と相応の読書の経験をもってしても、これらの書物は、簡単なアクセスを拒むのです。木田氏が言う、この古典を読むための「専門的訓練」、これを何とか時間と資源が、人的にもシステマ的にも厳しい制約下に置かれている現代に、呼び戻すための1つの試みが、このエッセイで紹介するスタディ・クエスチョン・メソッドによる読みです。

今は情報があれば、正しい判断ができると信じられている時代です。「もっと情報があれば」「適切な情報があれば」、様々なリスクが避けられると考えられています。内容を上手く解釈する／得るための読み方が現代にはたくさんあります。もちろん、これは大変重要なことです。しかし、だからと言って学問的読みが全くなくなって良いわけではありません。というのは、情報としての読みは、認識構造に与える影響が限られているのに対して、学問的読みは、認識構造そのものを変化させるものだからです。内田は、「古典として読む」ことの意義をこう述べています。

新しい情報を得るという意味では役立たないかもしれないが、情報を見る眼の構造を変え、情報の受けとり方、何がそもそも有益な情報か、有益なるものの考え方、求め方を——生き方をも含めて——変える。変えるといつて悪ければ新しくする。新規な情報は得られなくとも、古くから知っていたはずのことがにわかに新鮮な風景として身を囲み、せまってくる、というような「読み」があるわけです。(内田1985: 12-13)

日本の大学では、かつて、特に人文社会系において、「講読」という読みの伝統がありました。長い時間をかけてコツコツと読むということは、日本の大学教育の中で中心的な位置を占めていました。しかし、それは「単に後追いつているだけだ」であるとか、「消極的である」とか、ひいては「まねをするだけ」といった評価を受け、現在ではあまり奨励されていないし、何よりそんなことをしては、2年で修士、3年で博士を終えることはとてもできません。となると、学生たちも定式的な知識として、思想を消化することとなりますし、私たち教員も、短期間である程度の成果が出そうなアプローチを勧めることとなります。

今は古典となったクーンの『科学革命の構造』<sup>3)</sup>は、「教科書」に関する論議で始まっています。パラダイムのある程度定まっている科学、つまり「通常科学」を許す分野では、教科書で修得した枠組みに則って、教科書が終わったところから研究を始め、何らかの意味で「新しいこと」を積み重ねることが出来ます。自然科学的な学問や、方法論が確立している一部の社会科学分野においては、古典を学ぶ必要はありません。物理学を修めるに当たって、

▶3 Thomas S. Kuhn, 1962, 1970, *The Structure of Scientific Revolutions*, The University of Chicago Press (= 中山茂訳、『科学革命の構造』、みすず書房 1971)

ニュートンを読む必要はないのです。このような分野においては、比較的短時間で新しい価値を付け加えることは可能です。もちろん、これは、分野が簡単だとか深淵だとかいうことを全く意味しません。

しかし、認識構造の変化を伴うような学問においては、この方法は成り立ちません<sup>4</sup>。社会科学の教科書、例えば、社会学入門といったものをいくら読んでも、実際の社会学の研究はおぼつかない状態です。それはだれそれが何を言ったという理論の概要や定義を与えますが、それだけでは、自らがオリジナルな思想を積み上げ、研究をしていくのには充分ではありません。そこで与えているのは情報としての読みだからです。

内田はこう書いています。

さて、本はどうすれば私の古典になるか、古典としての読み方は、教えられていない。小学校以来の教育が、一般に本を古典として深く読む態度と技術を教えるどころか、本とは合理的すなわち安直に読み捨てるべきものという観念と風習を身につけさせるように、事実上なっている。(内田1985:16)

もしアカデミアが、そして、特に思想や社会科学系の学問が何か社会に貢献できることがあるとすれば、少なくともその一つとして、認知構造は訓練できるということをしめすことが入るように思われます。しかし、このような教育はすでに死に絶えようとしており、それをやるためのシステムも制度的裏付けもありません。

それでは、社会科学で「教科書」の役目をするものはなんのでしょうか？それは「古典」であるというのが筆者の考えです。1つの考え抜かれた論述をその論者の思考体系に極めて忠実に寄り添いつつ、論者の認知構造をもう一度自分の頭に構築すること、これこそが、社会科学や思想、哲学において、「教科書」をマスターすることになるのです。

日本の大学人はこのことを知っており、長く実践してきました。しかし、これには時間と手間がかかります。今の大学で雑務に追われながら、大勢の学生を相手に短時間でこれをやるのは難しい。このような現状の中で、それではどうするかと考えた末思いついたのが、筆者がかつてアメリカで受けた教育からヒントを得た、スタディ・クエスチョン(Study Questions, SQ)を使った読み方です。

スタディ・クエスチョンという言葉は、一見矛盾をはらんでいるように思えるかも知れません。通常、教師が学生に対してする質問は、相手の知識や考え方を引き出すためや、試験の場合には、相手を試したり、評価するためになされるからです。そのような状況では、スタディ、つまり「学ぶ」、「勉強する」ということは、それ以前になされておき、それがうまくできているかを試験するために質問がなされます。このように考えると、スタディ・クエスチョンは、矛盾といえます。しかしアメリカでなされていたスタディ・クエスチョンとは、「学ぶための質問」なのです。学生は、その質問に答えることによって、おのずと難解な学問書を読んでいくための方法論を身につけます。スタディ・クエスチョンはその手引きとなる質問なのです。

▶4 もっとも、自然科学において、この認識構造の変化を伴わないかと言えば、そうではないでしょう。パラダイムという言葉が示そうとしたことは、実は、このことです。そして、それを学ぶ最適な方法は、クーンによれば「見本例を学ぶ」ということで表現されています。それは、その学問でもっとも典型的でかつ重要な問題とされる古典的な問題への解答例であったり、代表的な実験例であったりします。それらを研究生生活の初期の段階でたたき込まれることにより、研究者は、認識構造の変化を経験することになるのです。

日本語でも、古典は読みにくいですが、まして英語の社会科学の論文となるとその難しさは倍増します。かなり英語に自信のある方でも、社会科学系の英語論文を正しく解読できる人は多くはありません。英語の古典的論文を読むというのは、言葉の壁と内容理解という2つの関門を通り越さないといけないからです。

本稿は、このSQを使った方法で英語論文を読んでいこうという試みです。「社会科学的読み」を身につけたいと思う人、英語の力をより精練したいと望む人に学問的文書を読むということを通して新しい経験をして頂きたいとの思いから、筆者が研究室ゼミの一貫として行った試みを書き起こしたのになります<sup>5</sup>。

学問的読みの方法というのは、何度も試みないといけないものではありません。最初は、時間がかかりますが、一度身につけてしまえば、他の著作の読解にも容易に応用が利くものです。また自身の創造力にも繋がります。スタディ・クエスチョン・メソッドは自覚的に読む方法なのです。

▶5 ゼミに参加してくれた糸川悦子さん、王センさん、市原攝子さんに感謝します。そのゼミの内容を、王センさんが詳細なノートに記録しておいてくれました。本稿は、そのノートをもとに加筆・修正しました。

## 2 | この論文の全体的な特徴

この論文は、『*The Foucault Effect: Studies in Governmentality With Two Lectures by and an Interview with Michel Foucault*』(Edited by Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller, The University of Chicago Press, 1991) という本のなかの「Insurance and Risk」(第10章) という論文です。哲学者で、フーコー学派でもある François Ewald の著述です。下記で引用している英文は、全て、この論文からのものです。

次に、実際にこの論文を読み始めるまえに、この論文の全体的な特徴をみておきたいと思います。まず、この論文は構造化されていない感じがあります。つまり、第1節、第2節などというように構造化されていません。そういった意味で、良くも悪しくも今の時代の論文ではないと言っても良いかも知れません。より教養的な論文の書き方に近いものがあります。この意味で、この論文は、「古典的」であるということが出来るかも知れません。反対に言えば、現在、当たり前のようにになっている、1節、1.1節という構造化が必ずしも普遍的な論文の構造ではないということに気づいてみて下さい。(と言っても、エwald論文のような構造で、論文を書くことをお薦めしている訳ではありません。)

加えて、解説の中で詳しくみませんが、この著者のコンマの使い方はかなり特徴的です。これはこの著者のくせ、あるいは好意的に言えば、スタイルということになるかも知れません。ただ、このような英語を「良くない英語」とか「正しくない英語」というように捉えないで頂ければと思います。現在、英語は国際語、とくに学問の世界では、共通のコミュニケーションのための言語として、様々な人々に使われています。国際社会では、英語母語話者で

ない人たちがお互いに英語でやりとりをする風景は珍しいものではないのです。

以下では、最初の第1段落から第4段落の解釈を行いますが、ここでは、**insurance**という概念を導入し、論じています。次の第5から第7段落では、**risk**という概念の導入と解説をおこなっていますから、論文のタイトルにある2つの概念を順番に紹介しているといえます。SQは基本的にその段落内で答えることができます。

### 3 Study Question Methodによる読解

それでは、各段落について、スタディ・クエスチョンに沿って内容を見て行きましょう。さきほども述べましたように、第1段落から第4段落はタイトルでも使われているキーワード「**Insurance**」について語っています。

#### 第1段落：

SQ：「保険」という言葉が多義的であるということの例としてエワルドは、どんな例を挙げているのでしょうか？ 具体的に答えなさい。

このSQに対する答えは、テキスト3行目の

**Private and nationalized companies, social security schemes, mutualist societies, companies run on a premium basis, insurance against accidental death, fire, civil liability<sup>6</sup>**

の部分です。

ただ、このたくさんのコンマで羅列されたものがどのようなまとまりとなっているのかを理解するのは少し大変です。特に、リストが入れ子になっている場合には。

まず、次の5つの大きなかたまり、

- ① **Private and nationalized companies,**
- ② **social security schemes,**
- ③ **mutualist societies,**
- ④ **companies run on a premium basis,**
- ⑤ **insurance against accidental death, fire, civil liability**

に分かれます。ただ、この文章は、規範的な英語の文章に慣れている私たちにとっては、少しショッキングです。というのは、これら5つのことがコンマで区切られているだけで、最後のまとまりの前に入れなさいと教えられているはずの、**and**がないからです。これは口語では起こりうるのですが、書き言葉では、特に、学生の皆様が論文を書くときには、避けるべきことです。

▶6 以下、引用英文のイタリックは原著によります。下線は説明の為、筆者が加えたものです。

しかし、この論文全体では、この**and**なしのスタイルは頻出するので、エワルドの特徴として覚えておきましょう。

そしてさらに、リストのなかにリストが入っています（最後の**insurance against x, y, z**の部分）。つまり、⑤番目のかたまりの中にも、コンマが2つでてきてますから、ここが入れ子になっているわけです。

したがって、上のリストの意味は、

- ① 私企業と国営企業、
- ② 社会保障、
- ③ 相互・互助社会、
- ④ 保険料のもとに経営されている会社、
- ⑤ 事故による死や火事や日常的に起こる危険に対する保険

となります。

#### 解釈\*

ここで挙げられたリストは、全て同じカテゴリーではありません。（通常、リストは同じカテゴリーのものを羅列するのですが……。）これはわざとこのように書いたとも考えられます。つまり、ここで、エワルドは保険というものの複雑性、多義性を強調したいのです。

SQの答えはここで終了ですが、第1段落は、エワルドの書き方のくせを掴む上でも、内容への導入という意味でも重要なので、続けて読んでいきましょう。

この複雑性、多義性の演出は、さらに、上の英文とコロン（:）で区切られた後続部でも続きます。ちなみにこのコロン（:）の用法も特徴的ですが、このようなコロンの多様もこの論文を通して起こるので、これもエワルドのくせとみるべきでしょう。

**: there are a multiplicity of such institutional types, which specialists have set out to classify in various ways, distinguishing between insurances of persons and property, mutualist and premium systems, social and private insurances.**

最初の部分は、「そのような制度的なタイプには、多様性がある」というのが直訳ですが、制度としての保険には、様々な種類があるということです。そして**which**以下で、これらの「保険」に関して、専門者たちが様々な方法でそれらを分類していると述べています。人に対する保険とモノに対する保険を区別する方法もあるし、相互互助（**mutualist**）といった形でのお金が掛からないシステムと掛け金のもとに構成される保険という軸によって区別する方法もある、そして社会や国家によって賄われる保険（例えば、日本の国民健康保険）と個人的に加入する保険（例えば、自動車保険）を区別する仕方もある、と述べています。

エワルドは、保険の複雑性、多義性を描き出すために、さらに続けます。



**Each insurance institution differs from the others in its purposes, its clientele, its legal basis.**

もちろん、ここでも、最後のコンマの後に**and**はありませんが、これはこれ以上気にしないことにして、意味をみましょう。「各々の保険は、目的や対象顧客、法的基盤などで互いに異なるのだ」と、重ねて、「保険」という言葉が数々の雑多なものを含んでいるということを示しています。

ここで、この第1段落において、エワルドが言いたいことはなにかと考えます。そう、もうはつきりしてきましたね。それは、「保険が多様である」ということです。これはこの段落のトピックセンテンスを探すことから確認できます。段落のトピックセンテンスとは、その段落で書いてある内容を代表するような文、まとめるような文です。この段落のトピックセンテンスは、一番初めの文です。

**The term ‘insurance’ is an equivocal one.**

というわけで、第1段落では「保険という言葉は多義的である」ということを確立しました。第2段落では、この多義的であることにさらに焦点をあて、論を展開していくことになります。

**第2段落：**

SQ(a)：この段落冒頭の文で、この「保険が多義的である」ということから、いくつかの疑問が出てくると述べています。それらは何でしょうか？

もちろん、これらの疑問は、それに続く段落2番目と3番目の質問形式の文で書かれています。

**Why do such different activities come to be thus grouped together under a common rubric? What do they have in common?**

つまり、第1段落でみたような様々に異なる活動が、「ある共通の見出し」の元にひとつにまとめられるのはなぜか？「それらに共通しているのは何か？」という疑問をエワルドは提示しているのです。

**解釈\***

さてここで少し英語の解釈をしておきましょう。「**A common rubric**」はある共通の見出しという訳になりますが、これは何を指しているのでしょうか？そうです、もちろん、「保険」という言葉ですね。

さて、次の文から、立てた疑問に対する答えが始まります。

**Actually, the term ‘insurance’ denotes not just these institutions but also a factor which gives a unity to their diversity, enables an institution to be identified**

as an insurance institution and signals to us what an institution has to be to be an insurance institution.

実際に、「保険」という言葉は、これらの多様な組織を意味するだけでなく、その多様性をひとつにまとめ、また、ある組織が保険として同定されることを可能にする要素も意味する。その要素は、ある組織が保険であるためには、どのようなものでなければならないのかを、我々に教えるものであるはずなのだ。

といった意味になりますが、要するに、「保険」という言葉は一方で、多様なものを意味することができるが、しかし、他方で、それら多様なものを束ねる（1つの言葉に束ねる）要素（**factor**）も持っているのだと指摘しているのです。英文解釈的には、まず、**not (only)···but also···**の構文になっています。その上でさらに複雑なのは、**which**節のなかで、動詞が3つ平行して使われていることです。**gives, enables, signals**で、これらの主語は、**a factor**ということになります。

ただ、ここでは、この要素（**factor**）は何か、ということは言っていません。それが出てくるのが次の文です。

**In this second meaning, insurance designates not so much a concept as an abstract technology.**

保険は、「抽象的なテクノロジー」という以上のものではない。

というのが、基本的な意味ですが、この**In this second meaning**というのは、もちろん「**factor**」ですね。**not so much**は、「ほとんど～だ」、という意味の表現です。

「抽象的なテクノロジー」と言われても、「???」という感じかと思いますが、このテクノロジーというのは、この論文を理解する上で大変重要な言葉となります。

このようなキーワードとも言える表現が出てきた時には、定義集などで調べるよりは、まず、その言葉がどのようにその論文の中で使われているかを調べてみるのがこのような社会学の文献を読む上では、大切です。

SQ(b) : **abstract technology**という言葉がイタリックで強調されているが、この段落内で**technology**という言葉は、どのように使われているだろうか？ その他の用例を書き出さない。

**答え\***

**technology of insurance** : 保険という技術

**technology of risk** : リスクの技術

**解釈\***

この**abstract technology**というのは、科学技術より、社会的な「技術」、つまり、社会の中で制度設計や習慣というやり方で、様々な人間活動や社会を安定させ、コントロールする為に使われる「技術」という意味で使われています。

SQ(c) : **technology**と同様の意味合いで使われている別の英単語を見つけなさい。

**答え\***

**Art**

**解釈\***

テクノロジーという用語がいったい何を意味しているのかを探っているところですが、**technology**を、辞書で調べても、単にその言葉のもともとの意味を理解することができるだけで、この言葉が、この文脈、あるいは、この論文の中で、どういう意味を持たされているのかを理解するにはあまり役に立ちません。むしろ、この場合のように、それがどのように使われているか、そして、さらにそれが言い換えられている言葉を見つけるというのは、論文全体を深く理解するために、大変有効な手段です。

たとえば、**technology**を辞書で調べたら、「技術」だと訳されています。ところが、この文の中で、単に技術と言っても、その本当の意味はわからないのです。その時、言い換えられる言葉として、**art**=技巧という言葉を見つけると、それによって、この文脈の中の**technology**はどんな意味をもたされているのかを理解しやすくなります。

この**technology**という語は、この論文を通じてのキーワードとなりますので、今の段階では、それが何を意味するのかが、完全にわからなくても良いので(むしろわからない方が良いので)、フラグを立てておくことにしましょう。

SQ(d) : 第1段落と第2段落のまとめとして、「保険」を定義している文がある。

それをみつけて訳しなさい。

**答え\***

**Considered as a technology, insurance is an art of combining various elements of economic and social reality according to a set of specific rules.**

という文がそれです。

**解釈\***

「技術として考えられたとき、保険というのは、経済と社会的現実の様々な要素を、ある特定のルールによって結びつける技である」というのが訳ですが、技術というのが、ものを作る具体的な技術ではなく、抽象的な技術(= **abstract technology** ; 先に出てきた表現です)であるということは、すでにおわかりかと思います。つまり、経済と社会的現実を結びつける技術として

**insurance**をみるのが、**insurance**として言葉で表される多様な具現のあり方を統一することになるとエワルドは主張しているのです。そして、これがこの論文の主題となります。

次の文章も訳しておきましょう。

**From these different combinations, there derive the different sorts of insurance institutions.**

これらの様々な組み合わせ（つまり、複数の経済的要素と複数の社会的現実の間の多対多の組み合わせ）から、異なる種類の保険組織が派生するのである。

という意味となります。

さて、ここまでのところをまとめると、第1段落で**insurance**が多義的であるということが描かれ、第2段落で、その多様な現われを**insurance**という言葉に統合する抽象的な要素があるはずで、それがつまりは、**insurance**が「社会的技術である」ということだと述べられました。そして、次の3番目の段落で、これらの関係についてみようとしています。

### 第3段落：

SQ(a)：この段落で探求する問題が、2番目の文で疑問として提示されている。  
この文を訳しなさい。

**What in fact is the relationship between the abstract technology of insurance and the multiple insurance institutions we contract or affiliate with?**

#### 答え\*

保険という抽象的な技術と、我々が契約したり加入したりする多くの現実の保険制度との関係は、実際どういうものであろうか。

#### 解釈\*

つまりここでエワルドが問題としたいのは、両者の「関係」です。エワルドは、この自ら提示した問いに対する答えとして、次の文で、**institutions are the applications of the technology**という一つの可能な答えを提出しています。つまり、具体的な保険制度の現れは（抽象的・社会的）技術を現実に適用したものである、という答えなわけですが、それなら、様々な保険は基本的に似通ったものになるはずだろうが、実際はそうでないということで、この最初の可能な答えを否定しています。そして、さらに、**Insurance institutions are not repetitions of a single formula applied to different objects**、つまり実際の保険制度は、一つの方程式をいろいろな対象に適用したものではない、と述べています。そして、さらに続けて、**Insurance institutions are not the**

**application of a technology of risk**と述べています。ここで、**the**の理解が非常に重要です。つまり、リスク技術のひとつの決まりきった適応ではない、と先の文を言い換えて、さらに強調しています。

それでは、先の質問の答えとしてエワルド自身の主張している答えを現しているのはどの部分でしょうか？ それは、**they (=insurance institutions) are always just one of its (=technology of risk) possible applications**の部分です。つまり、実際の保険(という現れ)は、リスク技術の多数の可能な適用のうちの一つなのだ、ということをエワルドは主張したいのです。

エワルドは、さらにこの自身の主張を説明します。**This indeed is something that the term 'combination' helps to make clear**、つまり、私たちが「組み合わせ」という意味をしっかりと理解することによってより明確になるといいます。**insurance institutions never actualize more than one among various possible combinations**、つまり、保険制度は多様な組み合わせの可能性の中から一つの可能性だけを具現する、というのが、彼の主張の言い換えです。ここで、「単に決まった技術の適応」と対比がなされています。単に決まった形式の技術の適用だとすると、結果は全部同じになるわけですが、実際にはいろんな組み合わせの可能性があって、実際どのような組み合わせが現れてくるのかは、限定されていないということを強調したいのです。

そして、

**So that, between the abstract technology and the institutional actualizations, we need to find room for a third term, which we will call here the insurance form.**

**insurance**に関連した3つ目言葉として、**form**という言葉を導入します。抽象的な技術と様々な制度的現れ、そして、「保険の形」という表現が導入されます。ただ、この段階では、まだ、**form**ということ、エワルドが何をいいたいのか、完全に明瞭ではありません。それは、**form**という言葉がイタリックにされていることから推察できます。つまり、エワルドは、**form**を特別な意味で使っているのです。しかし、ヒントがあります。この段落内で**form**と同様の意味合いで使われているもう一つの英単語があるのです。ちなみに、これは、第2段落で**technology**の意味合いをより深くつかむために使った方法です。さて、**form**と同様の意味合いで使われているもう一つの英単語は何でしょう？

そうです。**shape**です。この単語は、以下の文章で使われています。

**Where the elaboration of the abstract technology is the work of the actuary, and the creation of the institution that of the entrepreneur, one might say that the aim of the sociologist, historian or political analyst should be to ascertain why at a given moment insurance institutions take one particular shape rather than another, and utilize the technique of risk in one way rather than in another.**

この長い文を訳しておきましょう。文頭から、最初のコンマまでは、保険の専門家（金融家）の仕事について述べており、それは、抽象的な技術を精密化することであるとしています。次のまともは、企業家の役割で、それは、保険制度を作ること、そして最後に、ある時点で、現実の保険がある特定の形式をとるのかを問うのは、社会学者、歴史学者、そして政治学者の仕事であると述べているのです。

これをもう少し解釈すると、ここで、著者は、自分の役割、自分（＝社会学者）がやりたいことを述べていることになります。

**This variability of form, which cannot be deduced from the principles of either technology or institution, relates to the economic, moral, political, juridical, in short to the social conditions which provide insurance with its market, the marker for security.**

技術や制度に収束させることはできない、この多様な形式は、経済、政治、道徳、法的なものに影響を受けているわけです。それはすなわち社会状況であり、その社会状況とは、安全（というものを）売る市場を保険に供給するのです。

ここで、市場や安全というものを売る市場といった表現は、キーワードとなります。

**These conditions are not just constraints; they can offer an opportunity, a footing for new enterprises and policies.**

さらに続けます。これらの条件は、制約条件ではない、チャンスでもある。ここで、**These conditions**は、社会的条件ということを示しています。そして**opportunity**を説明して、それらは（＝これらの条件）は、新しい事業や政策のための足がかり（**a footing**）となるのです。

さて、次の文も重要です。

**The particular form insurance technology takes in a given institution at a given moment depends on an *insurantal imaginary*:**

保険の技術が、ある時期のある制度で、どのような形式をとるのかは、保険的想像力に依拠する、と述べていますが、ここにきて、もう一つの重要な言葉が出てきました。それは、「想像力」です。

続けて、この*insurantal imaginary*をもう少し説明しています。

**: that is to say, on the ways in which, in a given social context, profitable, useful and necessary uses can be found for insurance technology.**

ある社会的状況において、保険のために、利益があつて、効果があつて、必要がある使い方が見つけられる方法かどうかは、「想像力」にかかっているのです。英語的には、**on the ways in which**の**on**は前の文の**depends**につながることに注意して下さい。

SQ(b) : ここで、もう一度この段落の最初の文に戻り、**a third sense**とは具体的に何か、そして第1番目と第2番目の**sense**は何だったのか、述べなさい。

**答え\***

第1番目 : **institution** 保険制度

第2番目 : **factor** 要素 抽象的な技術 (社会的な装置を作る技術!)

第3番目 : **a third sense : form** 保険の形態

この長い第3段落の最後の文も訳しておきましょう。

**Thus, the birth of social insurance at the end of the nineteenth century needs, for example, to be analyzed as a realization of a new form of insurance, linked to the development of an insurantal imaginary which in this case is also a political imaginary.**

したがって、19世紀の終わりの社会保険の誕生は、保険的想像力、それはこの場合政治的想像力でもあるのだが、その保険的想像力の発達と関連付けて分析される必要がある。

**insurantal imaginary**に加えて、**political imaginary**という表現も加まりました。それは、単に経済的利益のみの追求ではなく、政治的なものも含んでいるのです。

**第4段落 :**

SQ : この段落のトピックセンテンスをみつけて訳しましょう。

**答え\***

以下の文となります。

**So one has an insurance technology which takes a certain form in certain institutions, thanks to the contribution of a certain imaginary.**

保険の技術が、ある特定の想像力のおかげで、ある制度の中で特定な形をとっていく。

といった意味になります。

**解釈\***

「ある特定の」という意味の**certain**がなんと一文のなかで3カ所も使われています。つまり、決まったものではなく、常に相互依存しており、移り変わるものだという側面に光をあてようとしているように解釈できます。

この文は、この段落におけるトピックセンテンスとなります。なぜこの文がトピックセンテンスなのかということは、この文の後の文を読むと一目瞭然です。次の文は、この文に対する説明であり、この段落では、基本的にこの文を中心にした議論が展開されているからです。

次の文も訳しておきましょう。

**Insurance technology and actuarial science did not fall from the mathematical skies to incarnate themselves in institutions.**

保険の技術と統計学は、数学的な空から降ってきて、自然に制度とへと生まれ変わるようなものではない。

といった意味になるでしょう。

訳は、このような感じですが、それはもっと具体的にはどのようなことを意味しているのでしょうか。反対に考えるなら、制度となるためには、どのような要素が必要なのでしょう。この問いを意識しながら、さらに読み進めていきます。

「保険技術と統計学は、それらが反映されたり、合理化されたりする多くの実践のなかで、次第に形作られてきたものだ。それらの実践のなかでは、保険技術や統計学は、原因というよりは、結果であって、それらがもうすでに決まった形をもっていると考えるのは、間違っているであろう。実際の経済的、道徳的、政治的な状況の結びつきは常に変化しているものであり、保険の実際も常に保険技術を変化させているのである。」といった意味のことが続けて書かれています。

つまり、2番目の文で出てきたように、**Technology; institution; form; imaginary**という4つのカテゴリーが、実際どのように絡まっていくかということによって、現実の保険の形が形成されていくわけです。そして、その絡まり方を決めるものは、最後の文で挙げられた経済的、道徳的、政治的な状況なわけです。

この2番目の文をまずみておきましょう。

**The way these categories — technology, institution, form, imaginary — articulate together is a problem of logical description which of course does not correspond to the real historic process by which maritime and terrestrial insurances were constituted.**

2番目の文では、これまでの段落でてきた重要な4つのカテゴリーが並べられています。**technology, institution, form, imaginary**です。これら4つがど



のように組み合わせられるかというのは、論理的問題なのだと述べています。その後の英文がかなり大変なことになっていますが、簡単に言えば、海洋事故などに備えて保険制度が発達してきたという実際におこった歴史的経過とは別に考えるべきだということで、論理的問題だという部分に対する注釈となっています。「海洋事故などに備えて保険制度が発達してきたという実際におこった歴史的経過」という形で述べていますが、これは、保険制度の歴史的研究から既に明らかになっており、この分野では、常識的な知識となっています。これをこのような形で、さらっと書くところがまた、エワルドの粋なところかも知れません。

最後の文章は、以下のとおりですが、今みた2番目の文と関連づけて考えるとより理解が深まります。

**Existing in economic, moral and political conjunctures which continually alter, the practice of insurance is always reshaping its techniques.**

実際の保険は、それ自身常に変化している経済、道徳、政治といったものの連関のなかでまた、つねに、その技術を変化させているのである。

といった意味となりますが、**the practice of insurance**、つまり実際社会に現れてくる保険(の商品)は、保険技術(**technology**, 統計学、損失計算など)や、保険制度や機関(**institution**)、保険の実際の形(**form**, これは、実際の一つ一つの商品というよりは、カテゴリー的なもので、例えばペット保険や地震保険などを思い浮かべても良いかも知れません)、そして、保険的な想像力(**imaginary**)をどう論理的に組み合わせるかということから具現しており、それら、特に保険的想像力は、実際の社会のなかで日々変化している、経済的、道徳的、政治的状況の影響をうけ、保険技術をまたさらに変化させているのだということを描き出しているのです。

ここまでが、**'Insurance and Risk'**というタイトルの最初の半分である**'Insurance'**について、エワルドが論じた部分でした。それは、自分の論文のなかで、エワルド自身が自分はこの論文においては、「保険」というものをこのように分解し、意味を持たせていくのだという解説だったといえます。これは、保険というありふれたものを、日常のコンテキストから取り出し、その学術的な特徴(それも一部の限られた側面なのですが)を浮かび上がらせるために、学問的にメイクアップし、衣装を着せ、この論文での主役の一つに仕立て上げた部分だということができるでしょう。

(平成28年10月24日受理、平成29年1月13日採択)